

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「チュルク諸語における膠着性の諸相－音韻・形態統語・意味の統合的研究－」

(2018年度第1回・通算第4回研究会)

日時：平成30年7月7日（土）14:00-18:00

場所：AA研マルチメディア会議室（304）

報告者：佐藤久美子（国立国語研究所）・児倉徳和（AA研）

(1) シャミシエワ・ナズグリ（AA研共同研究員，大阪大学大学院）

「キルギス語における動詞 *bol-* について」

本報告ではキルギス語の「〈名詞〉 *bol-*」「〈形容詞〉 *bol-*」「〈動詞〉 *bol-*」を取り上げ、議論した。

まず、「〈名詞〉 *bol-*」には、①*bol-*が本動詞として機能し、物事・出来事の存在の意味を表す用法、②変化を表す本動詞である用法、③軽動詞として機能し、*bol-*の結合によって複合動詞が成立するという用法の三種類があることを述べた。次に、*bol-*と*kil-*（する）の対立について、「〈名詞〉 *bol-*」が*kil-*（する）と対になるのは③のみであることを指摘した。

また、「〈形容詞〉 *bol-*」に関し、「〈形容詞〉 *bol-*」は、物事・出来事の状態変化を表すが、「〈形容詞〉 *kil-*」は、大まかに分けて、i.祈願の言葉として用いられる場合、ii.状況・状態・出来事・物事の変化を表し、無生物が主語になる場合、iii.人を主語として状況・状態・出来事・物事の変化を表す場合が多いということについてまとめた。

最後に、「〈動詞〉 *bol-*」の形式を取り上げ、「〈動詞〉 *bol-*」は、動詞と*bol-*の間に、*-mak*, *-may*, *-gan*, *-day*, *-ču*, *-bas*などの接尾辞を挿入することによって始めて成り立つこと、そしてそれぞれの構造の意味用法や特徴について述べた。

本報告に続く質疑応答では、以下のような質疑・コメントがなされた。

1. 第三類の「〈名詞〉 *bol-*」の名詞は、「〈形容詞〉 *bol-*」の形容詞とはどのように区別しているのか。形容詞を区別する基準はどのようなものか。
2. 第一類の「〈名詞〉 *bol-*」と第二類の「〈名詞〉 *bol-*」の両方とも名詞と*bol-*の間に複数形を表す接尾辞 *-lar*が入るのか。
3. 第二類の「〈名詞〉 *bol-*」の名詞と*bol-*の間に所有接尾辞の他に、とりたて詞の「も」が入るのか。また、「も」以外にも「だけ」「さえ」「まで」などを入れてテストしてみてもいいのではないか。

(2) 青山和輝（AA研共同研究員，東京大学大学院）

「チュルク系言語の後置詞およびトルコ語のあらたな「後置詞」について」

チュルク系言語には名詞由来の後置詞が数多く存在するが、ある名詞が後置詞として機能するためには、後置詞の定義上、第一に補部に名詞（句）をとる必要がある（内側の後置詞化）。この条件は、複合語標識（所有接辞）をとるか、補部を与格・奪格にすることで満たすことができる。第二に、文中で形

容詞句・副詞句として機能できる必要がある（外側の後置詞化）。この条件は、意味的制約（「時間」を表す句以外は主格のまま副詞句として使えない）を回避するか、斜格をとることで満たされる。発表では、名詞由来後置詞を複合語標識と斜格の有無によって分類し、仮説とその例外を検証した。

トルコ語の *sonrası* 「～後」, *arası* 「～間」の後置詞的用法は従来ほとんど記述されていないが、このモデルの予測通りの性質を有する。*arasında* 句が場所／時間副詞句として自由に生起できるのに比べ、*arası* 句は時間副詞句としてしか機能できず、語順にも制約があるが、これは上記第二条件と関連づけて説明できる。

本報告に続く質疑応答では、以下のような質疑と議論がなされた。

質問：発表内では後置詞末の所有接辞-I を項を増やす手段と見なしているが、これは必ずしも当てはまらないのではないか。たとえば副詞的要素にはしばしば何も受けない-I が現れる (ex. Uygh. *här kün-i* 「毎日」)。

回答：考慮していなかった。トルコ語にも所有接辞のつく副詞があるが (ex. *daha doğru-su* 「より正確には」)、すべて文副詞であり、前の文を受けていると分析できる。しかし挙げていただいたウイグル語の例は時間副詞であり、全く別のメカニズムを考える必要がありそう。

質問：タタール語には *bezneñ arada/yaña* のように、他のテュルク系言語に見られる形式と比べて所有接辞のないバリエントがあるが、どう解釈するか。

回答：テュルク系言語のほとんどで、所有構造は *bizim arabamız* のように属格と所有接辞で二重に標識されるが、*arabamız* あるいは *bizim araba* のように片方を脱落させる傾向がある（特に一人称複数の場合に多いようだ）。たとえばサハ語では人称代名詞の属格形は存在せず、これの極端な場合と解釈できる。タタール語では逆に、所有接辞が一致しない傾向が強く、挙げていただいた例のように脱落してしまうのではないか。

質問：対格支配の後置詞は避けられるとあるが、サハ語にはたくさんある。他の指摘を見ても、サハ語はほかのテュルク系言語とはかなり異なるふるまいをするようだ。

回答：今回の発表はトルコ語の色を強く押し出して構成したので、このようなコメントは有難い。対格支配の後置詞に関しては、先行研究を見てもよく分からないことが多い。

(3) 児倉徳和 (AA 研所員)

「現代ウイグル語の文末詞」

本発表では、現代ウイグル語の文末詞 *chu*, *ghu*, *de*, *he* の意味分析を、他の言語についての研究で仮定されている、発話参加者の心内で生起する情報・知識の処理のモデルを援用しながら行った。このモデルでは、新規の情報と発話参加者の心内に既に存在する知識が矛盾しないか照合し、矛盾する場合にはその矛盾を解消する処理を行うとされる。本発表ではこのモデルを援用し、現代ウイグル語の文末詞が、文の情報内容と発話参加者の知識について行われる処理を表すとした。そして、結論として、*chu* は新規の情報と既存の知識の照合をせずに直接新規の情報を登録する、という（有標の）処理を表す。*ghu* と *de* は共に新規の情報と既存の知識の照合を行い、*ghu* が両者の間に矛盾が存在することを、*de* は両者の間に矛盾が存在しないことを表す。*he* は話し手が文の情報内容に確信を持っておらず、既存の知識との照合とそれに伴う処理が保留されていると主張した。

本発表に関しては、文の述部を構成する他の要素と文末詞の意味機能の組み合わせに関する質疑や、文末詞をとらない文形式の位置づけなど、現代ウイグル語の文法体系全体における文末詞の意味機能の位置づけについての議論がなされた。

(4) 佐藤久美子 (AA 研共同研究員, 国立国語研究所)

「今後の成果公開に向けての打ち合わせ」

次回以降の研究会の日程調整を行うと共に、本研究課題の成果公開の一環として行う海外の国際学会でのワークショップの企画準備、本研究課題の終了後に公刊する成果論文集の編集方針について議論を行った。

参加者は 20 名 (所員・共同研究員 11 名、コメンテータ 2 名、外部参加者 7 名) であった。それぞれが専門とする言語・分野の見地からコメントを述べ、活発な議論が行われた。